○課題名　「東南アジア水環境研究学際コンソーシアム形成」
○代表者名　「大垣眞一郎」
○中核機関名　「東京大学」

課題の目標・概要
1．目的　東南アジアは急速な経済発展をしており、それに伴い都市への人口集中化が起きている。それに伴い水環境の急速な破壊が顕在化しており、市民は高い健康リスクにさらされている。化石燃料を大量に消費するような日欧米諸国型の環境浄化手法は特にこの地域では適切なアプローチではなく、独自の環境浄化手法・評価手法の開発が必要である。本研究は特にメコン川を中心とした東南アジア地域における大学間研究コンソーシアムを形成することにより、諸国が取り組んでいる東南アジア独自の環境浄化技術、環境観測方法、また、効率的な水利用に関する研究成果を世界に発信する基盤を作ることを目的とする。 **2．内容**　本研究では東南アジアの１０大学と１機関とパートナーシップを結び、その情報ネットワークや独自調査から東南アジアにおける水環境の現状や社会的ニーズを詳細に探り、２回の国際シンポジウムを開催することによりその成果やパートナー機関の研究成果を世界に発信する。世界の研究者の東南アジア関連研究発表も公募により募る。 **3．アジア諸国とのパートナーシップの観点**　アジア諸国は水環境の保全に非常に高い関心を持っている。良質な居住環境の確保という観点だけではなく良質の観光資源の確保という視点からもその重要性が高い。そのような関心の高い分野での連携は、大きな学問的な向上を望めるだけではなく、強力なパートナーシップを創り出す。 **4．複数機関間連携の必要性**　本研究は東南アジアの１０大学と１機関、米国とスイスから２大学、そして東京大学が連携して行う。当該分野における我が国のリーダーシップを世界に認識させるためには、アジアの大学からだけではなく欧米の有名大学が参画して遂行される必要がある。 **5．推進委員会を構成する機関・組織等**　東京大学、米マサチューセッツ工科大学、スイス連邦工科大学、アジア工科大学院、その他代表的アジアの大学からの代表研究者によって推進委員会を組織する。必要に応じ、他機関研究者の参画を要請する。

諸外国の現状等
1．現状　東南アジア地域は自国の産業開発や先進諸国の資本投資により急速に工業化が進んでいる。しかし、経済的効率を重視するあまり環境への配慮は最小限であり、日々汚染は進み、人々の生活基盤が冒されている。東南アジア各大学は環境工学分野において独自に研究活動を行ってはいるものの、その成果を統合・発表する学術基盤はない。また、国際学会参加や国際研究専門誌への投稿も主に経済的な理由から活発ではない。 **2．我が国の水準**　我が国の環境工学研究は世界的にもトップクラスであることは専門学術誌や国際学会などへの投稿論文の多さを見ても明らかである。東南アジア研究も個別研究チームベースではあるが欧米諸国よりも活発に行われてきており、当該分野で世界的リーダーシップを確立することは十分に可能である。また、我が国の東南アジア諸国に対する政府開発援助は歴史・規模共に世界一であり、膨大な経験とノウハウの蓄積がある。

課題の実施により期待される効果
東京大学を主軸とし、東南アジア地域の大学と環境研究コンソーシアムを企画し、学術的リーダーシップを確保することにより、我が国を中心とした学術的な発信を行う。これにより、アジア諸国との国際的連携を深めるとともに、得られた知見や連携体制は我が国の政府開発援助などをより効率的に行う際に役立てることが出来る。

課 題 実 施 体 制

○課題名　「東南アジア水環境研究学際コンソーシアム形成」
○代表者名　「大垣眞一郎」
○中核機関名　「東京大学」

平成一四年度

中核機関：東京大学

・国際シンポジウム準備会議
・調査研究
・推進委員会開催

連携機関：アジア工科大学院

・調査研究補助
・国際シンポジウム準備

↓

平成一五年度

中核機関：東京大学

・調査研究
・評価委員会開催
・国際シンポジウム運営

連携機関：アジア工科大学院

・調査研究補助
・国際シンポジウム開催

↓

平成一六年度

中核機関：東京大学

・調査研究
・評価委員会開催
・国際シンポジウム運営

連携機関：アジア工科大学院

・調査研究補助
・国際シンポジウム開催

期待される効果
1. 東南アジアにおける水環境研究学際ネットワークの構築
2. 東南アジア水環境研究分野の飛躍的な発展
3. 東南アジアにおける我が国を中心とする学際コンソーシアムの形成